日本銀行の支店建物 2

日本銀行大阪支店

中村茂樹 日本銀行文書局技師

明治十五年（一八八二）十月十日の日本銀行開業からわずか二カ月後の十二月十八日に日本銀行の大阪支店が開設されました。二番目の西部支店（現在の北九州支店）が開設されるのは一〇年以上後です。大阪支店は本店とともに一三〇年の日本銀行の歴史を築いてきました。現在全国に配置されている支店三二店舗の中で別格です。第二回は、そんな大阪支店の建物を紹介します。

大阪支店開設から中之島移転へ

日本銀行大阪支店は、江戸時代に豪商鴻池家などが両替店を構えた今橋筋（現在の中央区今橋）の一角に商家を借用した急拵えの店舗として開設されました。畳敷きの上に外山支店長（注1）以下一五名の行員が机を並べる店舗は金庫設備もなく不便を生じ、翌十六年十月に大川町（現在の中央区北浜四丁目の一角）に土地家屋を購入して移転しました。

移転当初はこの大川町の敷地に新店舗を建設する予定でしたが、敷地の都合から方針を変更し他に敷地を求めることとなり、現在の支店が建つ北区中之島二丁目にその地を定めました。

中之島は大川（旧淀川）が堂島川と土佐堀川に二分された、その二つの川の間に細長く延びる中州で、江戸時代には交通運輸の便の良いことから各藩の蔵屋敷が軒を並べて全国各地の物資が集まり、堂島川の対岸には堂島米会所（注2）が設けられ、米相場の取引が行われる「天下の台所」大坂そのものでした。

その中で、日本銀行大阪支店の建設

現在の外観

新築時の外観（日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵）

（注1）外山支店長
初代日本銀行大阪支店長外山修造理事。明治十五年（一八八二）十一月～明治十八年（一八八五）六月の間支店長を務める。大阪支店のみ理事が支店長に就任。辞任後も関西財界の指導者として活躍。

（注2）堂島米会所
江戸時代に大坂堂島で開かれた米の流通市場。徳川幕府の公認する世界初の「先物取引市場」であった。明治二年（一八六九）に廃止された後、堂島米穀取引所（明治二十六年［一八九三］～昭和十四年［一九三九］）として一時再建された。

（注3）駅逓司大阪郵便役所
明治四年（一八七一）三月に制定されたわが国最初の郵便制度に基づく郵便役所。大阪中央郵便局の前身。日本銀行大阪支店の前庭に石碑と郵便制度発足一〇〇年の記念ポストが設置されている。

（注4）五代友厚
天保六年（一八三五）―明治十八年（一八八五）鹿児島市に生まれる。大阪造幣寮（現在の造幣局）の誘致、堂島米会所の復興、大阪株式取引所（現在の大阪証券取引所）および大阪商法会議所（現在の大阪商工会議所）の設立など関西経済界発展の礎を築いた。東の渋沢栄一と並び称される関西経済界の重鎮。

（注5）大阪衛生試験所
明治八年（一八七五）設立の大阪司薬場を前身とする官営の医薬品試験機関。移転先の新試験所建物は辰野金吾と葛西萬司の設計により明治三十一年（一八九八）十月に完成。

用地は、島原藩の蔵屋敷があったところ（現在の敷地は隣接していた水戸藩と加賀藩の敷地の一部も含む）で、明治に入って蔵屋敷が取り壊され、明治四年（一八七一）の郵便制度発足にともなって大阪で最初の郵便役所である駅逓司大阪郵便役所（注3）が設置されました。

同役所が北浜に移転した後は、大阪経済界の基礎を築いた五代友厚（注4）が一時屋敷を構え、更に明治十三年（一八八〇）から内務省大阪衛生試験所（注5）が設置されていました。

同用地の取得には、代償として大阪衛生試験所の移転建設を日本銀行が行うという条件が付き、明治三十年（一八九七）十一月にようやく日本銀行の所有地となりました。

江戸時代の米穀取引の中心地に大阪支店の新店舗用地を定め、この地が再び金融の中心地に返り咲いたことは縁のあることかもしれません。

写真1　辰野金吾
（日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵）

建築に関わった四人の建築家

日本銀行本店本館および西部支店の建築に続く大阪支店新築の設計は再び辰野金吾（写真1）に委ねられました。

設計チームには本店本館の設計からパートナーを組む日本銀行技師の葛西萬司（注6）のほか、大阪支店新築設計が着手される明治三十年（一八九七）に日本銀行技師となる片岡安（注7）と長野宇平治（注8）の二人が加わります。

本店本館の建築に、ほぼ掛かりっきりだった辰野は、同建物が完成した後、明治三十一年（一八九八）に建築学会会長と工科大学長に就任するなど日本建築界の育成に注力していきます。

大阪支店の建築に三人の後輩建築家を参画させたこともそのひとつかもしれません。

特に、辰野の勧めで大阪支店新築計画に合わせるように日本銀行技師となる長野は、日本銀行建物の設計を託す辰野の後継者として期待されました。

工事途中の明治三十三年（一九〇〇）十月に葛西が技師長を辞職したあと、長野は日本銀行技師長として大阪に転任し、現場監督に携わります。

さらに、片岡も工事途中の三十四年（一九〇一）八月に技師を辞職し、長野が辰野のもとで一人、建物の完成に携わることになります。

明治三十年（一八九七）十二月に着工した工事は、五年二カ月の歳月と、八〇万六千余円の工費を費やし、明治三十六年（一九〇三）一月に完成しました。

大阪市民はその壮大な白亜の石造洋館に驚愕したと言われ、大阪駅（注9）と泉布館（注10）に並ぶ大阪三名所のひとつに加えました。

大阪支店が竣工した明治三十六年（一九〇三）は、大阪で国内最後にして最大となった「第五回内国勧業博覧会」（注11）が開かれ、また築港大桟橋が竣工し、更に日本で最初の市電（市直営の電車）が大阪に生まれた年でもありました。まさに商工業都市大阪の興隆を全国に知らしめた年でした。

確立された様式建物

新築時の大阪支店は石積みレンガ造り二階建ての本館と、レンガ造り平屋の金庫館（写真2）および機械室・食堂等の付属家で構成されています（図1）。

新築時の本館の外壁は、構造体のレンガを裏積みし、外側に本店本館と同

（注6）葛西萬司
帝国大学工科大学（現在の東京大学工学部）明治二十三年（一八九〇）卒業。日本銀行技師として本店本館、西部支店および大阪支店の設計に関与。日本銀行を辞職後、辰野金吾と共に辰野葛西建築事務所を主宰。旧盛岡銀行本店、東京駅等を設計。

（注7）片岡安
帝国大学工科大学（現在の東京大学工学部）明治三十年（一八九七）卒業。日本銀行技師として大阪支店の設計に関与、工事中に日本生命保険副社長片岡直温の婿養子となる。後に辰野金吾と共に辰野片岡建築事務所を主宰。大阪で活躍し、晩年大阪商工会議所会頭も務める。

（注8）長野宇平治
帝国大学工科大学（現在の東京大学工学部）明治二十六年（一八九三）卒業。日本銀行技師長として辰野金吾の後継を務め、日本銀行本支店を始めとする数多くの銀行建築を手掛けた。

（注9）大阪駅
二代目大阪駅本屋として明治三十四年（一九〇一）に完成。豪壮な石造コシック建築。

（注10）泉布館
明治四年（一八七一）に造幣寮（現在の造幣局）の応接所として建築。設計はT・ウォートルス。現在、国の重要文化財。

（注11）第五回内国勧業博覧会
初めて海外からの出品もあり、事実上日本で最初の万国博覧会。

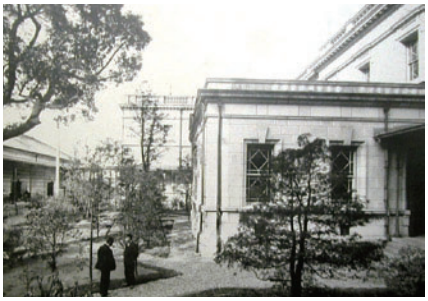
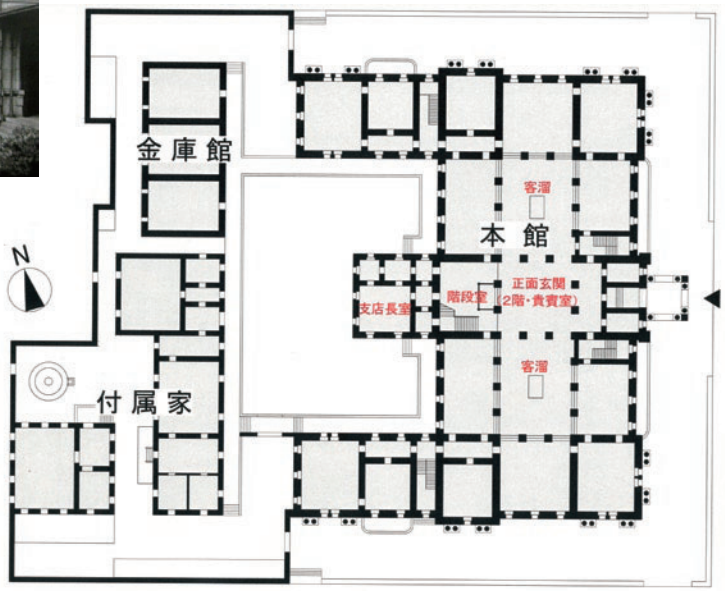


写真２　中庭の左側が金庫館。右側は本館西側の支店長室。（日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵）

写真３　新築時の客溜（日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵）

図１　新築時の本館平面図



じ岡山県北木島産の花こう岩を積んで、全体を重厚な石造建物としています。

同じく床は、鉄骨梁に波形鉄板を掛け渡しコンクリートを充填した防火床で、床仕上げを檜板張り、床下面を波形鉄板の露出仕上げとしていました。

屋根は、中央の八角ドームおよび客溜上部を鉄骨造りの小屋組みとし、その他の屋根を木造小屋組みとした上で、木製下地の上に銅板及び石板スレートを葺き、更に客溜上部の屋根の一部をガラス張りとして、階下の客溜に自然光を採り入れていました。（写真３）

また、各室に蒸気暖房機と電灯を設置したほか、各窓の防火シャッターおよび屋内外の消火栓も完備していました。

意匠面の特徴としては、大阪支店本館は本店本館と同じネオバロック様式と言われていますが、様式建築として、より完成度が高いと評価されています。外観は東西南北の四面ともそれぞれ完全対称で、東正面と南北側面には同一デザインの連窓と四本の円柱に支えられたペディメント（注12）を付して、いずれのコーナから眺めても、様式建築としての姿が成立しています（写真４・５）。

外観だけでなく、正面玄関、支店長室、貴賓室等の平面計画にもシンメトリーを巧みに取り入れているのも特徴です。

また、更に、外部の装飾要素を室内にも巧みに取り入れることにより内外観のデザインの統一を図っているのも特徴です。

細部に目を向けると、一般部分の木造系デザインと同じ手法を用いながら、装飾品をバランスよく組み込むなどの工夫により荘重な空間を作り出している貴賓室（写真６）と、その貴賓室につながる鉄骨トラスアーチを巧みに組んだ階段室（写真７・８）に完成度の高いデザインを見ることができます。

金庫館の増築

新築時の金庫は狭く設備も貧弱であったため、大正十五年（一九二六）八月に金庫改築の計画がたてられ、旧金庫館を取り壊しの上、新たに鉄筋コンクリート造り地下一階地上三階建ての金庫館を新築することになり、昭和六年（一九三一）十月に着工し、同九年（一九三四）三月に完成しました。金庫館新築に合わせて老朽化した付属家全般の模様替え工事も行いました。

また、大阪支店はかねてから敷地が狭かったため、将来の営業所新築の場合を予想して周辺の隣接地を機会あるごとに購入する方針をとり、昭和十年（一九三五）頃から本館正面敷地前の空

（注12）ペディメント
西洋建築における切り妻屋根の妻側屋根下部と水平材に囲まれた三角形の部分。

写真５　本館北側面外観

写真４　本館正面外観

写真６　貴賓室
（日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵）

写真７　正面玄関から見る階段室
（日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵）

写真８　階段室

地一七〇坪を大阪市から購入するなど新たな用地拡大に動き始めました。

その様な動きの中で、日中戦争の開始以来本行業務はますます膨張し、更なる増改築または新築のための相当広い用地拡幅が急務となりました。

昭和十五年（一九四〇）から昭和十七年（一九四二）にかけ西側隣接地一一四三坪のうち七二七坪を買収したもののまだ十分とは言えず、戦後の昭和二十八年（一九五三）に西側隣接地の残り四一六坪（旧日綿實業移転跡）を購入することにより、ようやく敷地拡張が完了しました。

本館の保存活用

戦後の業務拡大により、昭和四十年代には拡張された敷地内に本館と金庫館を含め二〇棟の建物が建つ状況でした（図2）。

老朽化の著しい分散した建物を統合して新たな支店建物を計画するにあたり、本館の建て替えが課題となり、地元市民および建築専門家からの本館保存の要望も取り入れ、可能な限り本館建物を残して新館を建てることになりました（図3）。

本館の業務機能を活かして保存活用するための対応として、昭和五十七年（一九八二）に外壁の石積みを全て残したまま内側のレンガ積み壁を撤去して新たな鉄筋コンクリート壁に置き換える改修工事を行いました（写真9）。

外壁石とドーム屋根の保存による外観保存の他に、二階の貴賓室と階段室を新築時のすがたで復元保存しました。

やむを得ずレンガ構造体は撤去されたものの、建物の外観がそのまま保存された本館がこれからも中之島の景観のひとつとして市民に広く親しまれることを期待します。

図２　新館増築前の配置図

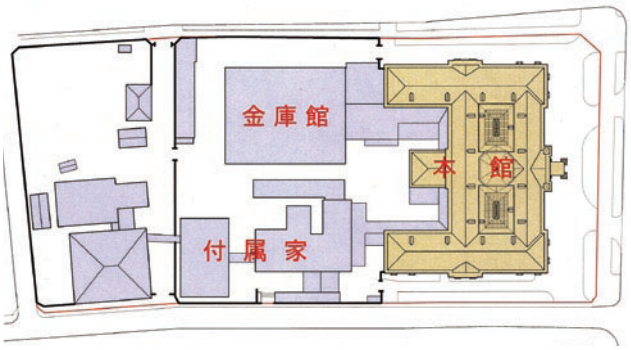


図３　現在の配置図

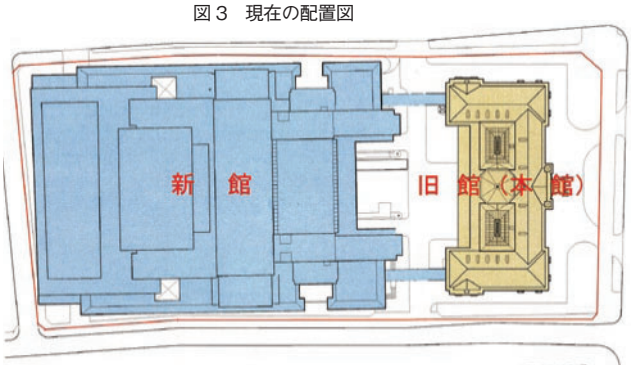


写真９　本館改修工事